

学びがわかり、成長を想像できる 比較可能なデータベースを

岡山県立勝山高等学校教頭
三浦 隆志



みうら・たかし

1982年鳥根大学法文学部文学科卒業。岡山県立備前高校、岡山県立邑久高校(担任12年、学年主任1年)、岡山県立岡山操山高校(担任6年、進路指導課長4年)などを経て、2011年度より岡山県立勝山高校教頭。担当教科は地歴(日本史)。

高校生と並び、大学ポータルサイトの主要な利用者となるであろう高校教員は、どのような情報や機能を期待しているのか。特に地方における大学選びの現状をふまえ、受験生が志望校を理解し、納得したうえでの進学を支援する大学ポータルサイトの要件について語ってもらった。

理解も納得もしないまま 志望校を決定することも

多くの高校現場が大学選びにおいて重視しているのは、「何をどのように学べるのか」「どう成長できるのか」だ。教員は大学案内やウェブ、進学情報誌などからそれらの情報を得ようとするが、具体的に理解するには不十分であることが多い。上記の観点から志望校を決定させるには、大学の授業を体験したり教員や学生に直接話を聞いたりと、大学生活を深く知るための行動を促す指導が欠かせない。こうした進路指導を行う中で感じているのが、都市・地方間の情報量の格差だ。複数の大学が近くにあれば、気になる大学を実際に見て比べることが可能だ。仮に志望校が遠方にある場合でも、近隣の大学を見て、比較の材料とすることができる。しかし、本校のように、気軽に行ける距離に大学がない場合、中身を見ないまま、学びたい学

問分野と入試難易度によって志望校を決めざるを得ない。自ら調べて納得したうえで志望校を決定した生徒に比べればどうしても動機は弱くなり、進学後の意欲減退や中退につながりがちだ。

日頃から生徒には、入試難易度だけで大学を選ばないよう指導はしているものの、自分との相性を見極められるだけの情報を自力で集めさせるのは難しい。不足している情報をどれだけ補えるかは、教員の努力次第だ。どの高校も大学見学ツアーや出張講義を通して大学を「体験」させるとともに、大学教員や自校の卒業生から情報を集め、各生徒によりふさわしい大学に目を向けさせようとしている。

比較ができなければ 大学選びには使えない

こうした現状をふまえ、一教員として大学ポータルサイトに対する考えを述

べたい。

全大学が共通の規格でデータを公表するという趣旨は評価できる。文科省の提唱の下でのデータの公表であれば信頼できるし、大学ごとの数字の算出方法のばらつきが解消されるのであれば歓迎すべきことだ。現状では、大学が公表するデータの中で生徒が関心を持つのは就職率くらいだが、それ以外のデータが全大学同じ基準でデータベース化されれば、関心が広がる可能性がある。

公表が決まっている項目の中では、「教育研究上の目的と3つの方針」「学部・研究科等の特色等」「教育課程」が、大学選びにおいて特に重要だ。高校現場が重視する、学び方と入学後の成長を説明する部分だからだ。どういう学生を受け入れ、どのような教育を通して、どんな人材に育てるのか、大学側が表明する内容に納得したうえで入学すれば、充実した学生生活につながるだろう。ただし、これらを抽象的な美辞麗句で表現されると意味がない。具体的に提示されて初めて、生徒が自分に合う大学かどうかを判断する材料になる。

では現在、予定されている内容の大学ポータルサイトが稼働したら、高校教員、高校生は使うだろうか。答えはノーだ。

今のところ私の周囲には大学ポータルサイトのことを知る教員はおらず、さらにその内容を聞いたなら多くは興味を示さないだろう。

致命的なのが、大学・学部・学科間でデータを比較する機能がないこと

だ。志望校を選ぶには、複数の大学間での情報の比較は欠かせない。予定されている大学ポータルサイトは、併願校を選ぶときや、同一大学内の複数の学部・学科の中から出願先を選ぶときにも不便だ。

データをダウンロードできないのも利用を遠ざける要因となる。公表される数値をどう読み解けばいいのか生徒はわからないだろうから、教員が比較すべき数値をピックアップしたり、表計算ソフトでわかりやすい数値に加工したりする作業が必要になる。韓国のデータベース「Academyinfo」は、こうした活用ができるようになっているという(資料)。大学選びに利用されることを想定しているのなら、欠かせない機能だ。

操作性が低いのも気になる。大学入試センターがかつて提供していたハートシステムは、教員免許の取得可否といった重要な情報を、階層を行ったり来たりしないと見られず、大変使いづらかった。大学ポータルサイトも現状の画面イメージを見る限り、タブなどで簡単に画面が切り替えられる機能は見受けられず、残念だ。

大学と利用者の双方に 利点のあるシステムに

大学ポータルサイトは総じて、誰のためのものかわからない。具体的な利用者を想定していないのではないか。高校教員、高校生の大学選びに役立つものを考えるならば、まず、今述べた機能面の改善を強く望むのである。

取り入れてほしい項目として、入学後の成長度、満足度を挙げたい。どのように成長できるのかを数値で見られると、生徒が自分の将来像が想像できるので、その結果ミスマッチが減り、修学意欲も向上するだろう。

授業科目、学生支援制度、施設・設備などの項目には学生の満足度が併記されていると、大学選びのためのツールとして質が高まる。当然、全大学が共通の基準で定期的に測定し、大学間で比較できることが前提だ。イギリスで使われているデータベース「Unistats」は、授業や環境、能力の向上などに対する満足度も調べられるそうだ。日本でもこういうデータがあれば、間違いなく役に立つ。

生徒が自分に合った学び方ができる

かどうかを判断する指標として、教育の特徴を具体的に書いた項目もほしい。自由記述欄に「担任制を採用」「1年次から全員が実習を行う」といった内容があれば、入学後の学びを想像できる。

加えて、ゼミや研究室の代表的な研究内容が大学ポータルサイトで確認できれば理想的

だ。高校生の利用を想定し、研究内容は具体的に平易な言葉で書かれることが望ましい。理解できることもさることながら、検索する際のキーワードと合致しなくてはならないからだ。

また多くの生徒は、「心理学をやりたい」といった漠然とした関心にとどまっており、「社会心理学」「発達心理学」などの具体的な領域までは考えられない。そうした生徒に対し、「統計的調査を基に、群集心理を研究する」「猿の行動パターンから、精神の発達を研究する」といった研究内容が提示されれば、入試難易度や知名度ではなく、学びたいことを最優先にした大学選びが可能になる。

利用者の立場から要望を述べてきたが、これらは大学側にとってもメリットになるはずだ。成長度と満足度の継続的な調査を行えば、自学の学生の実態が把握でき、教育改善に役立つだろう。成長度、満足度、学び方といった項目は、知名度が低い大学、規模が小さい大学にとってこそ、入試難易度に関係なくアピールできる要素になる。

こうして大学選びの基準を多様化させることが、「学力の高い生徒が、入試難易度の高い大学を選ぶ」という単純な構図を打破するきっかけになるのではないか。大学の中身を多面的に理解したうえで入学する学生が増えるので、中退率を減少させる効果も見込めるだろう。

序列化につながるという理由で情報公表に消極的な大学があるようだ。しかし、少なくともわれわれ高校教員は、教育の方針や内容、育成プランをもっと詳しく知りたいと思っており、積極的に公表する大学に視線を向けることになるだろう。大学ポータルサイトがより充実され、高校生の志望校選びに使えるデータベースになることを期待したい。

資料 韓国の大学データベース「Academyinfo」の概要と特長

概要 韓国の高等教育機関には、主要情報の公表と政府への提出が義務付けられている。提出された情報は「Academyinfo」に集約される。項目によって年1、2回または随時更新され、虚偽もしくは不誠実な情報を公示すると正・変更命令が下される。

特長

- ・各校のデータを比較閲覧できる
- ・表データとしてダウンロードできる
- ・自己評価を義務化し、その結果を公表している

※大学ポータル(仮称)準備委員会資料を基に進研アドが作成